

試験日           ： 2025 年 11 月 9 日（日）  
入試種別        ： 3 年次編入学・転入学試験  
学部・研究科：社会学部 社会学科  
科目名           ： 専門科目（社会学）

## 問1 解答例

### ① ジェンダー

生物学的性差（sex）に対し、「社会的・文化的に構築された性別」を指す用語である。この概念は、性別に基づく抑圧や不平等を明らかにし、社会的相互作用を分析するために用いられる。また、LGBTQ など多様な性のあり方を理解する上でも重要であり、誰もが自分らしく生きられる社会の実現に関わる概念である。

### ② 官僚制

社会学の用語としての官僚制は、M・ウェーバーの理論に関するものである。ウェーバーは、官僚制を組織目標の合理的ないし効率的追及にとって最良の管理形態であるとした。しかし、人間は目的合理的な予測可能な行動だけをするとは限らないため、逆機能も生じる。官僚制は現代大衆民主主義の正当性根拠としての合法的支配に適合する組織形態であるが、人間を支配し自由を阻害する非合理的組織でもある。

### ③ 階層

個々の人間は収入や財産、学歴、職業、知名度などの違いによって、それぞれが社会的地位を持っているが、階層とは一定の社会的地位を共有する人々の集合体を意味する。階層という概念は、階級と区別するために作られた。階級が歴史的な概念であって、階級間に敵対的な関係あるいは質的な相違を前提とするのに対して、階層は非歴史的・操作的な分類概念であり、社会的資源の配分または獲得の機会が量的に異なっていることを前提としている。

### ④ 相対的不満（はく奪）

人がはく奪（欠乏）感を覚えるのは、主に自身の状況を他の個人や集団と比較して納得がいかない場合であるということを説明した用語である。そういうはく奪（欠乏）感が生じる際、個人ないし集団は、何らかの準拠集団を比較の基準にとる。

### ⑤ 社会運動

社会の再編を目的とした様々な集団による活動を指す。社会運動の目的には多様な幅がある。組織の形態もまた、明確に組織化されている運動もあれば、ネットワーク的な運動もある。1960 年代以降は、環境保全運動やフェミニスト運動など、社会的・文化的価値観やそれに基づく社会構造を問い直し、変革することを求めた運動が起きるようになった。これらは「新しい社会運動」と呼ばれている。

## 問2 解答例

### ① アクション・リサーチ

社会の中で生じるさまざまな問題に対して、当事者と研究者が協働しながら解決策を考え、実践を通してその有効性を検討し、またその結果から解決策を再考して、さらなる問題解決を目指す研究実践である。

### ② ランダム・サンプリング

量的調査法において用いられる、作為の無い偶然に委ねられた標本（サンプル）の抽出方法。これを正しく行いことができれば、理論的には偏りのない標本を得ることができり。

### ③ 参与観察法

調査者自身がその場に入って、当事者のひとりとなり、当事者の視点を獲得しながら、自分と周囲を観察するという質的調査法。

### ④ 二次分析

自分が直接収集したデータを「一次データ」というのに対し、自分以外の人や集団・機関が収集したデータを「二次データ」という。二次データを用いて、新たな目的や手法によって分析を行うことを二次分析という。

### ⑤ フィールドワーク

実際の現場や現地に赴き、そこに生きる人たちの声や思いに直接触れる質的調査法。もともとは人類学の用語だったが、社会学でも用いられるようになった。

## 問3 解答例

### ① M・ウェーバー

ドイツの社会学者で、政治学・経済学・歴史学など社会科学全般にわたる業績を残している。最も知られている著書は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』であろう。この著書は、西欧資本主義の成立・発展をプロテスタンティズム（その中の特にカルヴィニズム）との関連を明らかにしたものである。

### ② E・デュルケム

フランスの社会学者であり、社会学を実証主義の科学として確立するために力を尽くした。代表作のひとつ『自殺論』では、自殺という現象を社会的要因から分析し、その背後にある要因を4つのカテゴリに分類した。

### ③ M・フーコー

権力と主体の関係を深く分析し、社会の见えないルールや規範がどのように形成され

るかを明らかにしたフランスの思想家。『狂気の歴史』では、狂気がどのように社会によって定義され、規範化されていったかを考察している。『監獄の誕生』では、監獄が権力を行使するための装置であることを示し、近代社会における権力の形態を探究した。

④ G・H・ミード

アメリカの哲学者・社会学者で、「自我は他者との関係の中で形成される」と主張した。彼の用いた「役割取得」「一般化された他者」「社会的自我」といった用語もよく知られている。シンボリック相互作用論の基礎を築いた人物とも捉えられている。

⑤ E・ゴフマン

日常生活における人々の社会的相互作用を「演劇」に例えて分析したアメリカの社会学者（カナダ生まれ）。彼の中心的な関心は、国家や市場などのマクロ構造ではなく、顔と顔を合わせた相互作用の場面にあり、そこに生まれる微細な秩序や暗黙のルールを解明した。代表作としては『日常生活における自己呈示』『儀礼としての相互行為』『スティグマの社会学』などがあげられる。

問4 評価のポイント

- ・用語の正しい理解がされていること。
- ・「現代社会におけるその問題」が明らかになっていること。
- ・「社会学的」な記述になっていること。